

定家

十五ノ三





—舞臺鑑賞—
 最初に塚の作物が引廻の儘で舞臺大小前に掘みられ、大いでワキの旅僧の登場となる。次第の囃子でワキツレを伴つて出たワキは舞臺に入つて次第、名ノリ、道行を讀ふ。これで北國から都に上り、千本の邊で折柄の紅葉を眺めてゐると時雨が降つて来て、傍の亭に立ち寄る事となり、論座へ行きかゝると、呼掛でシテの里女が現れる。

シテはワキに其處は定家卿の建てた時雨の亭であると教へ時雨の詠歌などを引いて語り、舞臺に入つて掛合數句あつて初同となる。「軒端の夕時雨」と正面へ二三足出て「古きに歸る涙かな」とヒラキ「庭も庭もそれとなく」と右へウケ「荒れのみまさる草叢の」と面つかつて見廻し「露の宿りもかれ〜」に」と直して「物すこき夕べなりけり」と三四足退り、返句にツメ足してワキに向ひ詞をいふ。今日は志す日なればとワキを墓所へ案内し、作物を石塔と見て、星霜古りて葛葛の這ひ纏はりたる由を互に語り、式子内親王と定家卿の御契りを語りたるシテは「なほ〜語り參らせ候はん」と正中に出て下に居り、クリ、サシとなる。

此間別に型はなく、クセは居グセ内親王と定家卿の哀戀を讀ふに止まる。ロンギとなり「この上は」とワキにアシラヒ、「我こそ式子内親王」と立ち上り見こみ「これまで見え来れど

も」とツメ足し「眞の姿は陽炎の」と静かに退り「石に残す形だに」と作物の眞前に立ち、恰も石塔にその姿を彫りつけたるかに見せるのである。「それとも見えす葛葛」と静かに作物を離れ「苦しみを濟け給へ」とワキにアシラヒ「言ふかと思へて失せにけり」と作物へ中入する。

間狂言は都千本の邊の者で、居語に定家葛の謂はれを述べて退場すると、ワキは松風吹く草の蔭に續經する旨を待請にうたふ。

囃子は習ノ一聲となり、後シテはこれを聞いて引廻の中から「夢かよ闇のうつゝの宇津の山」と語り出し、地との掛合すんで「外はつれなき定家葛」と引廻を除くとシテは床几にかけた姿を現すのである。ワキは進み出て下に居り「あら傷はしの御有様やな」と合掌して弔ひ、シテはこれに應へて語り、妙經の功力によつて執心の葛も解けし態で「はろ〜と解け擴これば」と左右の袖を振るる心にアシラヒて作物を出る。

やがてこの報恩にありし雲居の花の袖を翻して舞を奏である態で序之舞を舞ふ。舞上げてツカを語り、さらに定型を繰返して幽婉の風情を舞ひ、「葛城の神姿恥かしや由なや」とワキの前で月の扇して面をかくしなどしたる後、作物に行き、文句につれて作物の柱を廻ることによつて葛葛の這ひ纏はる状を示し、「形は埋もれて失せにけり」と作物の中で杖の扇して下に居り直して出てトメル。



葛山

囃子方清座すれば、宵籠の定家葛葺きたる山の作物に幕引廻し、後見これを舞臺



大小鼓前に出す。前シテ此中に申入し、後シテ誦ひ出でより幕を下ろす。シテ床几に凭りて在り。

定家	役別	前シテ里女	後シテ式子内親王	ワキ旅僧	ツキツレ從僧	間狂言
	書小ノ能	面一若女又ハ深井・小面 紅入髪帯 襟一白二 (白練ニモ)	面一泥眼又ハ舞女 襟一白二 著附一摺箔又ハ白練 袷 大口 圓箔紅入髪帯 長組(白又ハ紫) 髪扇	角帽子 襟一淺黄 白大口 水衣 綴子腰帶 電輪扇	角帽子 襟一樟 白大口 練水衣 綴子腰帶 扇繪扇	塚(定家葛葺)
	裝束附其他	髪 圓箔	圓箔紅入髪帯	著附一小格子厚板	著附一無地腹斗目	
	大鼓					
	無シ					

定家

素盞座席順

ワシキテ

次第相合 山より出づる北時雨山より出づる
北時雨行方や定めなかるらん

名ワキスラリ これハ北國方より出でたる僧
にてハ我いまだ都を見ずハ程に。

この度思ひ立ち都に上りハ

冬立つや旅の夜乃朝まだき。



道行合打切

せつなまゝの舞



○大小鼓もチツ打ッ
張出し口薄

シテ上カカリト
シテ上カカリト

機を得ぬれば甲定家葛も乙が丙る
候もアほろイとウとエ解けオ擴カこれば
よろアとイ足弱車乃火宅カを出スて
たるありがたアよイこの報恩カにいハづ
さらばありし雲居乃花の袖昔を
今に返すなるその舞姫乃小忌夜
面アなイの舞乃ウ有様エやオなカ序之舞

古今 舞の舞の舞の舞
仕舞 舞の舞の舞の舞
は 舞の舞の舞の舞



シテ上カカリト
シテ上カカリト

面アなイの舞乃ウ有様エやオなカ面カなイや
面はゆのア有様イやウなエもオとカより
この身ハア月イの顔ウばエせオもカ曇キり
がアらイにウ桂エのオ黛カもキ落ケちコぶクる
候アりイ露ウとエ消オえてカもキつケたコなクや
葛アのイ葉ウ乃エ葛城カのキ神姿ケ恥コかクや
由アなイやウ夜エのオ契カりキ乃ケ夢コの中クにと